福岡教育大学大学院教職実践専攻年報　第11号　219-220（2021）

【課題演習抄録】

多様な考えを受容する道徳科授業に関する研究

髙　橋　幸　奈
Yukina TAKAHASHI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：道徳科授業，教材，正しい答え，時事問題

1　研究の目的

文部科学省(2018)は，道徳の教科化の具体的なポイントとして,「答えが一つではない課題に子供たちが道徳的に向き合い(中略)道徳性を育む」と示している。また，道徳教育を実施する上で，指導法が登場人物の心情理解などの型にはまりがちであるという課題が挙げられている(中央教育審議会 2016)。関連して，心情を問う場面発問が多いことで，資料に描かれている世界の表面的なところで話し合いが展開され，(中略)その結果，多くの子どもが「そんなこと読んだ時からわかった」や「道徳の時間って毎回同じ」という思いをもつに至る(谷口 2014)という指摘もある。

また,森本(2018)は教科書の問題に焦点を置き，①教科書会社発行の教材(副読本)を用いた授業と，②同テーマにおける自作教材を用いた授業実践の検討を通じて，教材の選定と発問の設定の方法についての研究を行った。その結果，①の実践では教科書会社発行の教材(副読本)に記載された発問を扱わなかったにも関わらず，それらの発問に対する答えのような記述をしている児童がみられたという。一方②の実践では，発問について考える情報として自作教材を位置付けることで，話し合いや記述の中で綺麗事ではない意見を出すことにつながったと考えられるという。このことから，説話自体や設問から児童はその授業で求められる「正解」を読み取っていることが指摘される(森本 2018)。実際に児童は，教師の発問や教材に道徳の「正しい答え」があると考えているのだろうか。

そこで本研究においては以上の問題関心から，児童の多様な考えを受容する道徳科授業に着目し，次の 2 つの仮説を検証する。1 つ目に児童が道徳科授業において「正しい答え」があると考えていること，2 つ目に内容が完結していない教材を使用することが多様な考えを受容するために有効であることである。

2　研究の計画

まず，道徳科授業における児童の意識を明らかにするために 1 回目のアンケート調査を行い，その結果を受けて時事問題を主教材とした授業実践および 2 回目のアンケート調査を授業終了直後に行った。1 回目のアンケート調査の対象は，X 市立 Y 小学校の 4～6 年生 203 名，実施日時は 2020 年 7 月 15 日，有効回答率は 95.1%(193 名)，内訳は 4 年生 70 名・5 年生 64 名・6 年生 59 名であった。授業実践と 2 回目のアンケート調査の実施日時は 2020 年 11 月 26 日，対象学年は 4 年生 76 名，有効回答率は 100%(76 名)であった。

回答方法は四件法で,「思う(ある)」,「ときどき思う(ときどきある)」,「あまり思わない(あまりない)」,「思わない(ない)」の順に 4・3・2・1 と数値化し，集計を行った。また，アンケート調査の記述から分析，考察した。

3　研究の内容

アンケート調査から 3 つのことが明らかになった。まず 1 つ目に，道徳科授業における児童の経験についてである。「道徳の学習で，みんなに合わせて自分の考えを変えたことがありますか？」(以下質問 A)という質問に対し，「ある」,「ときどきある」,「あまりない」と回答した児童の割合が 73.2%(143 人)であったことから，少なくともまわりに合わせて自分の考えを変えた経験のある児童が多数を占めていると言える。

2 つ目に，道徳科授業における児童の思考についてである。「道徳の学習に正しい答えがあると思いますか？」(以下質問 B)という質問に対し，「思う」,「ときどき思う」,「あまり思わない」と

回答した児童(56.5%，111 人)に，「何が正しい答えと感じたことがありますか？(複数回答可)」(以下質問 C)と尋ねた。すると，「教科書にのっていること」を選択した児童は 45.5%(51 人)，「お話の主人公の行動」を選択した児童は 49.1%(54 人)であり，教材に関するこれら 2 つをまとめると，質問 C に回答した児童の 64.5%(71 人)を占めていた。このことから，児童は教材の内容や教材に示される内容を道徳科授業における正しい答えのひとつと考えている可能性が伺える。

3 つ目に質問 A と「道徳の学習で，自分の考えを言えなかった，または言わなかったことがありますか？」(以下質問 D)という 2 つの質問の回答とその関係を分析した。表 1 の結果から，自分の考えを言えなかった，または言わなかった経験のある児童は，まわりに合わせて考えを変えている可能性があると考えられる。

表 1　質問 A と質問 D の回答とその関係

	質問 D/平均
質問 A　ある(30 人)	3.4
質問 A　ない(52 人)	2.8

これらの結果を受けて，時事問題を主教材とした授業実践を行った。時事問題を取り上げた理由は，時事問題のような議論の完結していない内容を教材とすることが有効ではないかと考えたからである。実践の内容はロボットと人間の違いを考える活動を通して，生命の尊さや人間らしさとは何かを考えるというものであった(内容項目 D-⒅生命の尊さ)。

授業実践および 2 回目のアンケート調査から 2 つのことが明らかになった。1 つ目に表 2 の結果から，時事問題を取り扱ったことが，児童にとって多様な考えを表出しやすい授業を実現するひとつの要因になり得たと考えられることである。質問 B における児童の自由記述からも個々の考えを認め合おうとしている様子が伺えた。

表 2　正しい答えがあると思わない児童の数(4 年生のみ)

7 月時点	32.9%(23 人)
授業実践後	51.3%(39 人)

2 つ目は，質問 B と「今日の道徳の学習で自分の考えをもつことができましたか？」(以下質問 E)という 2 つの質問の回答とその関係についてである。表 3 の結果から，自分の考えをもつことができた児童は，道徳科授業において正しい答えはないと考えている傾向があることがわかる。また，7 月に実施したアンケート調査において自分の考えを変えたことが「ある」と答えた児童 11 人中 9 人が質問 E で「できた」と答えた。質問 B においても「道徳は正しい答えではなく，自分の考えでいいと思った」や「道徳は人によって考えがちがうと思うし，そのちがいを理解していけばいいと思う」という自由記述が見られた。このことから，時事問題を主教材として取り扱ったことが，多様な考えを認め合うことにつながったと考えられる。

表 3　質問 B と質問 E の回答とその関係(4 年生のみ)

	質問 B/平均
質問 E　もてた(46 人)	2.0
質問 E　もてなかった(4 人) あまりもてなかった(3 人)	3.1

4　成果と課題

(1)成果

成果としては 2 つ挙げられる。1 つ目に，道徳科授業において児童は，正しい答えがあると考えていること，またそれは教科書に掲載されている内容やお話の主人公の行動などの教材に関する内容と捉えている可能性が伺えることである。2 つ目に，時事問題を主教材とすることは，児童が多様な考えを表出しやすく，また正しい答えを探さずに自分の考えに自信をもつことができるという点で有効であったと考えられることである。

(2)課題

まず，正しい答えはないということに重きを置いたことで，戸惑いの様子を見せた児童が数名見られた。これらの児童への支援が 1 つ目の課題である。2 つ目は，教科書と併せて時事問題を教材として取り扱うにはどのような工夫が必要かを探ることである。教科書を使用することを念頭に置きながらも，児童の学習効果を高めるための一手段として，時事問題の使用方法を検討することが今後の課題となる。

主な引用・参考文献

谷口雄一 2014 資料のもつテーマを感じとる資料分析 明治図書出版道徳教育 10 月号 pp.16-18
中央教育審議会 2015 教育課程企画特別部会 論点整理
中央教育審議会 2016 教育課程部会 考える道徳への転換に向けたワーキンググループ 資料 「道徳教育について」
森本洋介 2018 小学校道徳教育における教育課程をどのように構想するかー副読本の説話を用いた授業と自作教材を用いた授業の比較ー 弘前大学教育学部紀要 120 pp.137-148
文部科学省 2015 学校における補助教材の適切な取り扱いについて(通知)
文部科学省 2018 小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編